

# 保育者養成校における音楽表現教育の取り組み

—『スイミー』の上演を通して—

Musical expression education at a preschool teacher college using “Swimmy”

芹澤 美奈子

Minako SERIZAWA

## 1. はじめに

幼稚園教育要領は、平成30年に改訂された。この中の領域「表現」においては、ねらいとして、(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。ということが示され、また、内容としては、(1) 生活の中で様々な音、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりなどして楽しむ。(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。(8) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。という項目が挙げられている。また、内容の取扱いとしては、(2) 幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむようにすること。とされている。つまり、「音楽」として、成り立つ以前の子どもらしい素朴な「音」への気付きや、音表現を認め、受容し、イメージを膨らましていく中で、様々な表現に発展できるようにするための保育者の資質が求められている。

また、領域「言葉」においては、ねらいとして、(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。ということが示され、内容としては、(9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。という項目が挙げられている。さらに、内容の取扱いにあたっては、(3) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験を結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、その楽しさを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。と示されている。つまり、子どもたちが生活の中で、言葉によって自分の思いを保育者や友達に伝えることや、他人の言葉に耳を傾け、伝え合う喜びを知るだけではなく、「絵本」「物語」といった文化として確立したものに触れる経験を通して、言葉の獲得や、イメージをふくらませる経験を多く積むことが示されている。

本研究では、保育者養成校の「保育内容研究 f (子どもの文化)」の授業で、絵本を題材に音楽劇を企画、創作し、付属幼稚園にて上演した過程、及び結果を分析したいと考える。その中で、子どもの豊かな音楽表現、言語表現を導く保育の在り方を考えていきたい。

## 2. 授業の概要

本学の「保育内容研究 f (子どもの文化)」では、以下のねらいを定めている。

- (1) 幼児の音楽表現について、その実態や問題点、指導の実践について理解することができる。
- (2) 幼児教育の基本について、領域「表現」の概念から理解し、その援助のあり方や具体的な指導方法の可能性について理解することができる。

保育現場における表現活動の実態、問題点として挙げられることの一つに、生活発表会、演奏会などの在り方があると考え。子どもが高いステージ上に立つ場面が多くみられるが、未だ観客に「観せるための劇」「観せるための音楽」が存在する。本授業では、子どもが主体的に取り組む生活発表会の在り方として、「保育者が主導で行った音楽劇」「子ども主体で生まれた音楽劇」のDVDをそれぞれ比較分析する講義を行っている。それを受けて、学生達からは、「主役が何人いても構わない。子ども達がやりたいと思う役が出来るような劇であるべき。」「脇役の子どもも輝く演出が必要。」「音と動きがそれぞれ生かし合いながら表現を高めていきたい。」などの声が上がっている。

そのような経緯を鑑み、音楽劇制作の課題では、以下のような教授内容を示した。

「付属幼稚園での上演を目指し、絵本を題材に音楽劇を創作しよう。音楽は、幼稚園教育要領領域『表現』の中で、音楽として確立する以前の音表現が大切にされていることを踏まえ、既成の音楽にとらわれず、素朴な音素材を選び、物語への色付けをしていこう」

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学短期大学部保育科

Department of Early Childhood Care and Education, Tsurumi University of Junior College, 2-1-3 Tsurumi, Tsurumi-ku, Yokohama 230-8501, Japan.

授業実施年月日：2016年9月20日、27日、10月4日、  
11日、18日、25日  
上演日：2016年11月1日 10時40分～  
受講生人数：女子27名

- 授業第1回目：生活発表会のDVD鑑賞 音と動きの即興的な表現を体験する
- 2回目：題材選び、脚本作り
- 3回目：配役決め 絵本をもとに、イメージをふくらませ音を探す
- 4回目：衣装、小道具について検証する。制作する
- 5回目：音と動きを合わせる
- 6回目：リハーサル 音と動きの即興表現の在り方について再確認する
- 7回目：付属幼稚園での本番上演

### 3. 音楽劇創作の経緯

音楽劇を創作するにあたり、まず、現在の音楽表現教育の基礎を築いたカール・オルフ（Carl Orff 1892-1985）の教育理念についての講義を行った。オルフは、即興表現を重視しており、「自分で演奏しながら踊れるようにするには、何といっても自分で考えて即興演奏ができるように」<sup>1)</sup>し、しかも「それは決して前もって考えて、それを記譜したり練習してはいけません。」<sup>2)</sup>と述べている。太古の時代から諸民族の原初的な音楽にみられるような、演奏者も踊り手も一体となった、しかもその場の雰囲気と自ら湧き上がってくる表現を良しとしているのである。また、その即興的な音楽表現では「ペンタトニック（五音音階）の段階は長くやるほどよい」<sup>3)</sup>とし、「五音音階には半音進行がありませんから不協和音がありません。それによって即興演奏は、著しくやさしくなります。（中略）言葉を覚えるように即興の力をつけることができるのです。」<sup>4)</sup>と述べている。つまり、即興は何もないところから生じるのではなく、五音音階を子どもに提示することで、子どもの豊かな表現を導くことができると考えているのである。

この講義を踏まえ、この一回目の授業では、リトミックスカーフを用い、即興的な動きを作る活動を行った。この際、「風に揺れる木の葉」というテーマを提示した。学生からは、「スカーフを左右に揺らす」「身体をくるくる回す」「身体全体を伸ばす、縮む」「床に寝転んで回転する」「壁にくっつく」などの身体表現が生まれた。これら動きに対し、身の回りの楽器を用い、「動きのリズムを見ながら即興的に音をつける」という活動を行った。以下がその時生まれた音表現である。

- ・スカーフを左右に揺らす／ウッドブロックで音の高低を重ねる
- ・身体をくるくる回す／木琴をグリッサンドで鳴らす
- ・身体全体を伸ばす、縮む／ティンパニの鼓面と杵を交互に叩く
- ・床に寝転んで回転する／ツリーチャイムを優しく鳴らす

・壁にくっつく／壁をマレットで叩く

これらの体験を通して、学生は音と動きのリズムをそれぞれ感じ合いながらより表現を高め合っていくということを学んでいるように見て取れた。また、この活動を通して、次回からの音楽劇創作について、「誰もが主役に見え、音と動きがそれぞれ感じ合いながら即興的に表現をし、観客も巻き込むことのできるような劇を作りたい。そのためには、演技者と観客が一体となれる円形ステージで表現したい。」という意見が生まれた。

第二回目の授業においては、どの絵本を題材にするかの討議がなされた。この際、『はらぺこあおむし』、『おおきなかぶ』、『シンデレラ』、『スイミー』の4作品が候補として挙げられたが、円形ステージで上演するのであれば、大海を自由きままに泳ぎ、表現できる『スイミー』がふさわしいとの意見が出され、題材が決定した。それを受けて、絵本をもとに脚本作りが始まった。絵本に書かれている言葉は正確にナレーションにするが、この物語のイメージをさらにふくらませる要素として、テーマソング作りが必要との議論がなされ、以下の曲が完成した。

『ぼくスイミー』（童謡 きらきら星のメロディに合わせて）

スイミースイミー ぼくスイミー  
毎日 楽しい 海の中  
みんなは 真っ赤 ぼくは黒  
泳ぐの誰より 速いんだ  
スイミースイミー ぼくスイミー  
ぼくのおはなし はじまるよ

みんなで力を合わせたら  
おっきいまぐろをやっつけた  
色んな いきもの出会ったよ  
くらげにこんぶ わかめ うなぎ  
スイミースイミー ぼくスイミー  
ぼくの おはなし おしまい

第三回目の授業においては、配役決めがされた。この際、①スイミー②赤い魚たち③まぐろ④くらげ⑤見たこともない魚たち⑥こんぶ、わかめ⑦うなぎ⑧いそぎんちゃくのグループに分かれたが、スイミーの役をやりたい学生が2名いたため、スイミーは2匹という設定での制作が始まった。

また、これを受けて学生各自が絵本からのイメージを基に身体の動きを模索し、それに音をつけていくという作業が進められた。（別表参照）

この過程の中では、既成の音楽は一場面しか出てこない。ほとんどの場面で、身体の動き、リズムをよく見ながら即興的に音を鳴らしていくということが確認された。そのため、即興の手段として、ド、レ、ミ、ソ、ラの五音音階（ペンタトニック）を用いることとした。このペンタトニックでは、ファとシの半音がなく、全音であるため、どのよ

うに木琴や鉄琴を叩いても、音が濁らず綺麗な音が編み出される。それぞれの役柄の学生がイメージをし身体での表現をすることで、それに合わせる音表現が生まれた。

第4回目の授業においては、衣装、小道具についての検証と制作が行われた。

それにより、以下の衣装、小道具が完成した。(別表参照)

この話し合いの過程で、学生からは「大がかりな衣装、装置はいらない。子どもの身近にある素材を使いたい。」「今回の劇は、幼児にみせることだけが目的ではない。実際に保育現場に携わるようになった時、子どもと劇をすることになる。そのために、子どもの発想から出る衣装、装置のイメージを大切に引き出していきたい。」「子どもの柔軟な感じ方を信じ、あえて布を被るだけの素朴な表現をしたい。」などの意見が出された。

第5回目の授業においては、本格的にナレーション、身体の動き、音を合わせるという活動がなされた。

今回行うのは、円形ステージである。そのため、学生全員で一つの輪を作り、①演奏はそのまの位置で行う。②演じる者は、出番のない時は、円に混じる。出番が来たらそのまま円の中に移動する。終わったら円に戻る。ということが話し合われた。

実際に動いていく中で、演者、伴奏者ともにナレーションを聞きながら感じたまま動くという姿が見られた。例えば、「広い海を動くスイミーと赤い魚たち」では、スイミーは速いスピードで走り、赤い魚たちはゆったりと動く。その中で、身体が触れ合うなどしたら、その出会いを大切に、動きの表現を変え、楽しく遊んでいる姿を表したり、楽器は魚たちの動きに合わせて音楽を作っていくという表現を行った。

第6回目の授業では、付属幼稚園のホールでのリハーサルが行われた。円形ステージを作るために、床にビニールテープで大きな円を描いた。ここで実際に演じてみることを通して、学生は「動きをあらかじめ作るのではなく、その場での他の人との出会いを大切にしたい。」「円の外にいる子どもたちにも一緒に演じてもらうような配慮をしたい。」「身体での動きの役割の者と演奏者が互いに感じ合って作り上げていく過程を本番でも楽しみたい。」などという討議を行い、確認がなされた。

第7回目の授業は上演本番である。

この日、5歳児クラスの幼児約90名が参加した。円形ステージを囲むように座り、上演が始まった。スイミーと赤い魚たちが泳いでいる場面では、幼児は食い入るように見ていたが、くらげが登場すると、「上手だね。」などと口にし、学生の導きのもとで、リトミックスカーフを上下に揺らしている中に入り込み、スカーフを手を伸ばして触ったり、スカーフに巻き込まれて歓声を上げる姿が見られた。また、いそぎんちゃくの登場シーンでは、学生の模倣をしながらスーパーボールやシャトルコックを包んだスカーフを思い切り投げ、それが円の外側にはねて飛んでいくのを楽しんだり、その素材がスイミーに届くように投げる様な

どが見られた。始終歓声があがっており、最後のテーマソングを歌う場面では、学生が書いた歌詞カードをもとに、一緒に歌う姿がうかがえた。

#### 4. 結果と考察—学生の振り返りレポートをもとに—

##### (1) 音表現について

###### —工夫したところ—

- ・楽器を鳴らしながら演じるのか、音がない状態で演じるのかを話し合った。
- ・くらげはふわっと動くので、木琴で柔らかい音を表現した。
- ・いせえびは、ギザギザと固いイメージをギロを鳴らすことで表現した。
- ・音の強弱をつけて物語に彩りを加えられるように工夫した。
- ・くらげの部分では、鉄琴を柔らかいマレットで演奏した。同じ音を連打することにより、ポワーンとした雰囲気を出した。
- ・いせえびの場面では、くらげとは対照的にギロで固い音をだすようにした。忍び寄ってくる雰囲気が出るよう、長く演奏したり短く演奏したりと工夫した。
- ・見たこともない魚たちの場面では、コミカルな身体の動きに合わせて、木琴で楽しそうに演奏するよう考えた。
- ・わかめはゆらゆらした感じが出るように、うなぎは不気味な感じが出るように、いそぎんちゃくは細かく動いている感じが出るように、意識して考えた。くらげを演じる際、リトミックスカーフを持つだけではなく、手に鈴を巻き付けて、動きながら音が出るよう工夫した。
- ・いせえびは、ギロを使つてのっそりとした動きと、ずっしりした感じをイメージしてもらえるようにした。
- ・くらげを演じる際、リトミックスカーフを持つだけではなく、手に鈴を巻き付けて、動きながら音が出るよう工夫した。
- ・本番では、自分のイメージを持ち、どの練習とも違う音、リズムで音を自由に出した。
- ・ずっと同じリズムではなく色々なリズムで演奏し、子どもがワクワクしながらできるよう工夫した。
- ・うなぎは、長くてよろよろしていることを表現しなかったで、低い音が出て、音が長く続くスプリングドラムを使った。

###### —難しかったところ—

- ・音楽に合わせて動いていると、終わるタイミングがお互いに伝え合うことが難しかった。
- ・セリフの声を消さないように音量を調節することが大変だった。
- ・セリフに合わせて長さを調節することが大変だった。
- ・身体を動かす学生が行っている動きに合うよう音楽をつけた。即興だったので、雰囲気を考え、作り出すことが大変だった。
- ・決まったものを演奏するのではなく、「自分で考えて音を出していく」ところに難しさを感じた。



## (2) 身体表現について

### —工夫したところ—

- ・わかめは、「まるでやしのようなわかめ」というナレーションに合わせ、風に揺られるようにふわふわと動いた。
- ・くらげは、ふわっとしたイメージがあるので、柔らかく弾むように表現した。
- ・いせえびは、3人で足を揃えて動くようにした。
- ・スイミーが、色々な生き物に出会って段々元気を取り戻していく姿を身体全体を使って表現し、子どもにわかりやすくダイナミックな動きを加えた。
- ・小さな魚は、細かい動きになるように表現した。
- ・大きな魚になるところでは、身長が低い人順に並んだり、腕をいっぱい伸ばし大きく見せるようにした。
- ・うなぎは、うねうねしているところを表現したく、身体を波状に動く工夫をした。

### —達成できたところ—

- ・回を重ねることによって、音と動きの出会いから始まる即興表現をより豊かにできるようになった。

### —難しかったところ—

- ・いせえびの進み方が、前が見えづらいので難しく、音を頼りに探り探り演じた。
- ・くらげは、リトミックスカーフが丸く見えるように動かすのが大変だった。
- ・くらげは、ゆっくりと動作をつけると、歩くスピード次第では終わるのが遅くなってしまい他のくらげの役の学生とタイミングがずれてしまったり、次の場面に移るタイミングが連動しないことが難しかった。
- ・一番難しく感じたのは、子どもたちに分かりやすく、絵本のイメージを感じさせる音、動きを考えるということだった。

### —今後の課題—

- ・もっと感情を込める、動きを大げさに表現するなどの新たな課題が生まれた。

## (3) 衣装、小道具について

### —工夫したところ—

- ・わかめは、絵本の色合いを再現し、茶色や紫色など、普通のわかめの色とは異なるものを使った。
- ・赤い魚は、透明の袋に赤い魚を描いたり、マープリングで余った紙で魚の形を作ったりなどして一色で済まないようにして色々な色を目で楽しめるようにした。
- ・くらげは、神秘的に見せるために、布は透明感のあるものを使い、水色や黄色、紫など色々な色を組み合わせ一つの大きな布にした。
- ・くらげは、透明の傘を使った。触手は長さを変えたスズランテープを沢山貼った。
- ・くらげは当初パラバルーンで表現しようとしたが、普通のパラバルーンは色が濃く、絵本のなかにあるくらげの色ではなかったため、パステルカラーのリトミックスカーフを使った。
- ・最後に大きな赤い魚になる時は、大きいカーテンに入る

ことを提案し、子どもたちにみせてイメージを広げられるようにした。

## (4) 言葉の表現について

### —工夫したところ—

- ・場面場面でアドリブを加え、子どもの反応を見ながら演じた。
- ・強そうに見せるように、大きな声を出して表現した。
- ・ナレーターにおいては、演じる人の動きを見て、その動きに合わせて読めるように工夫した。

### —難しかったところ—

- ・子どもにわかりやすい言葉で表現しようとした結果、説明的な言い回しが多くなってしまった。
- ・本来絵本というものは、絵と言葉から子どもが想像して楽しむものだと考えている。しかし、言葉の説明を増やしたことで、絵本本来の良さが失われ、子どもの想像力が広がる部分が少なくなってしまった。
- ・聞き取りやすさを重視するために、なるべくゆっくり、かつ棒読みにならないように読むことが難しかった。

## (5) 学んだこと、達成感について

- ・皆、それぞれ色々なイメージがあり、それをどのように再現するかなど話し合い、理解することは難しいこともあった。しかし、皆で試行錯誤し、一つに仕上げていくことはとても達成感があった。
- ・音楽一つで劇の雰囲気を変えることができて、改めて音楽の重要性を学ぶことができた。
- ・説明的な言い回しを避けることで、子どもたちがイメージをふくらませやすい劇になるということに気付いた。
- ・リーダーに必要なことは、他人をまとめる力ではなく、どの仕事に誰が向いているかを察知する能力であることを学んだ。今後まとめる役を任された時は、リーダーだから何でも自分でやろうとするのではなく、仕事を割り振って効率よく作業を終えられるようにしたい。
- ・子どもたちは、セリフも聞いているが、登場したものや動き（視覚物）に興味に向くということを知ることができた。
- ・子どもたちが場面場面で反応し、歓声を挙げてくれたことで、自分自身の動きや音作りもさらにダイナミックなものに仕上げることができた。
- ・全体でイメージの共有や同じ思いを持って進めていくことが一番大切であることを学んだ。
- ・観せる側が楽しむだけの作品を作るだけではなく、観ている側も一緒に参加しているような気持ちになれるような作品を作ることが重要になってくると感じた。

## (6) 自身の保育観について

- ・自分が保育者になった時にも、子どもの豊かな発想を生かした表現活動を行いたい。
- ・子どもを楽しませることのできる保育者になりたい。
- ・一年生の時であれば、子ども目線というよりも自分たち

おはなし	音の効果	小道具の工夫
<p>ひろいうみのどこかに ちいさなさかなのきょうだいたちが たのしくくらしてた。みんなあかいのに いっぱきだけはからすがいよりまっくろ。でもおよぐのは だれよりもはやかった。なまえはスイミー。</p> <p>ところがあるひ おそろしいまぐろがおながすかせてすごいはやきで ミサイルみたいにつっこんできた。ひとくちでまぐろはちいさなあかいさかなたちを一ひきのこらずのみこんだ。にげたのはスイミーだけ。</p> <p>スイミーはおよいだ。くらいうみのそこを。こわかった。さびしかった。とてもかなしかった。</p> <p>けれどうみにはすばらしいものがいっぱいあった。おもしろいものをみるたびに、スイミーはげんきをとりのどした。にじいろのゼリーのようなくらげ。</p> <p>すいちゅうブルトザーみたいないせえび</p> <p>みたこともないさかなたち。みえないいとでひっぱられてる</p> <p>ドロップみたいな いわからはえているこんぶやわかめのはやし</p> <p>うなぎ。かおをみるころには しっぽをわすれているほどながい</p> <p>そしてかぜにゆれる ももいろのやしのきみみたいな いそぎんちゃく</p> <p>そのとき いわかげに スイミーはみつけた。スイミーのとそっくりの ちいさなさかなのきょうだいたち。「でてこいよ。みんなであそぼう。おもしろいものがいっぱいだよ。」</p> <p>「だめだよ。」ちいさなあかいさかなたちはこたえた。「おおきいさかなにたべられてしまうよ。」</p>	<p>『スイミー』のテーマソング</p> <p>鉄琴 ツリーチャイム 鈴</p> <p>スプリングドラム</p> <p>無音</p> <p>鉄琴 鈴</p> <p>ギロ</p> <p>木琴</p> <p>ベリーダンスの腰巻</p> <p>スプリングドラム</p> <p>ツリーチャイム</p> <p>「パート・オブ・ユア・ハート」のピアノ演奏</p>	<p>スイミーの衣装は黒いリトミックスカーフ。</p> <p>赤い魚たちは、透明のポリ袋に赤い魚を沢山描き、それを着る。</p> <p>まぐろの衣装は、グランドピアノのカバー。</p> <p>透明なビニール傘にスズランテープを大量に垂らす。</p> <p>リトミックスカーフを何枚かつなぎ合わせ、2人で持って上下に揺らす。</p> <p>グランドピアノのカバーの裏側。</p> <p>青いポリ袋にスズランテープを沢山貼り、被る。</p> <p>緑、黄緑のリトミックスカーフ</p> <p>黄土色の長い布</p> <p>スーパーボール、シャトルコック、ピンポン玉をスカーフで包む。</p> <p>赤い魚たちは、透明のポリ袋に赤い魚を沢山描き、それを着る。</p>

おはなし	音の効果	小道具の工夫
「だけどいつまでもそこにじっとしているわけにないかないよ なんとかかんがえなくちゃ。」		
スイミーはかんがえた。いろいろかんがえた。うんとかんがえた。それからとつぜんスイミーはさげんだ。「そうだ」「みんないっしょにうごくんだ。うみでいちばんおおきなさかなのふりして。」	無音	
スイミーはおしえた。けっしてはなればなれにならないこと。みんなもちばをまもること。		
みんなが一匹きのおおきおなさかなみたいにおよげるようになったとき スイミーはいった。「ぼくがめになろう。」	木琴 カスタネット クラベス コンガ	大きな赤いカーテン
あさのつめたいみずのなかを ひるのかがやく ひかりのなかを みんなはおよぎ おおきな さかなをおいだした。	スプリングドラム	まぐろの衣装は、グランドピアノのカバー。
	『スイミー』のテーマソング	

の演じやすさを優先していたと思う。みんな常に、「この音なら子どもも楽しめる」「これだと子どもたちには分かりづらいのではないか。」「どうしたら子どもの印象に残るか」を子ども目線で考えた。

- ・子どもたちに楽しんでもらうためには、自分自身が楽しむことを学んだ。
- ・就職先で劇を上演することになっても、子どもたちから出る「音」の発想を大切にしたい。
- ・音楽は、子どもが一番身近に感じるもの。生活をしていく中で様々な音楽に触れるので、それを劇に取り入れることで、楽譜だけではない音表現を劇にも取り入れられるのではないかと学ぶことができた。
- ・初めからある楽譜を使う音楽ではなく、その場の雰囲気に合わせて音表現を大切に引き出せるような保育者になりたい。
- ・子どもたちは、観ているだけでなく、音も十分に楽しんでいる様子がかがえた。音に敏感になり、子どもたちの音で感じている姿を見つけ、引き出せるような保育者になりたい。
- ・保育者は、劇をきっかけに子どもたち自身が楽器に増え合えるような機会を設けたり、ごっこ遊びに発展させるなどの工夫が必要になってくると感じた。

今回題材として学生自らが選んだ題材『スイミー』は、保育現場において人気のある絵本ではあるが、小学校低学年の国語の教科書に出てくるものである。そのため、視覚的な要素が子どもたちにとって、絵本の内容の理解を深めるのに不可欠な要素だと考えることができる。学生たちは、今回の活動を通して、衣装、小道具の工夫をすることで『スイミー』の世界観を表現できるようにしていた。特に、リトミックスカーフを素材として選ぶことにより、絵本中の色彩を忠実に再現できるように努力する姿勢がうかがえた。

また、身体の動きに関しては、絵本の言葉のイメージから感じる動き、リズムを大切にし、その時その時にわきあがってくる感情を身体で表しながら、子どもたちの反応をうかがい、動きの表現に誘い、共に感じ合って動きの表現を高め合っていく姿がみられた。

音による表現では、身体の動きに合わせて即興的に表現できるよう、素朴な音素材を選んでいた。既成の音楽に頼るのではなく、感じたままに表せるよう柔軟なリズム、メロディーを考え創作していった。ナレーションに合わせ、スイミーとその仲間たちや、くらげ、いそぎんちゃく、こんぶやわかめの登場するシーンでは、ゆったりとした音で表したり、まぐろの登場シーンではスプリングドラムを使ったり、あえて無音の時間を設け緊迫感を出すことで緩急の

メリハリをつけている様子がうかがえた。

前述したように、幼稚園教育要領では、「音楽」として確立する以前の「音」への気付き、表現を重要視している。保育者としては、子どもの自分なりの素朴な表現を受け止め、様々な遊びに展開できるような資質が求められている。

今回の一連の活動を通し、学生は、それまでの自身の保育観を変えた様子がうかがえた。この中で、音楽劇は、「観せるための劇」ではなく、表現する過程を大切にしながら、上演者も観客も一体となったものを創り上げていくことに大切さに気付いた。また、音表現は、それ単独で存在するのではなく、言葉、身体の動きとゆるやかにつながり、時には一体となっていることへの気付きも生まれた。

学生自らが音楽劇を創り上げ、付属幼稚園で発表するという形式を取ったが、この一連の活動を体験したことで、保育者が演じるだけではなく、子どもたちが演じる側にまわった時、どのように指導していくのかを考えることが重要であると考えた。具体的に述べると、①観せるためだけではなく、演じる側においても子どもが遊べる音楽劇②子ども自らが主体的に取り組める音楽劇③作り上げる過程を楽しめる劇、といったことが挙げられる。

子どもの小さな発見を見逃さず、感じたままに表現することを受容し、音、言葉、身体の動きが一体となった表現に導くことができる保育者を育てていくことが今後の課題である

#### 【引用文献】

1. 「カール・オルフ博士を迎えて こどもはリズムに生きる」NHK編書、1962、p.5
2. 同書、同頁
3. 前掲書1、p.9
4. 同書、同頁

#### 【参考文献】

1. 『幼稚園教育要領』平成29年告示、フレーベル館
2. 島川香織「音楽劇づくりにおける言葉と音楽表現の関連について」教育総合研究叢書 第5号、2017
3. 岡裕美「保育者養成における子どもと音楽の関わりの一考察～オペレッタの取り組みによる学習成果～」千葉敬愛短期大学紀要40、2018
4. 紙屋信義「保育者養成における子どもミュージカル発表の実際―付属幼稚園での『こぶとりじいさん』の実践を通して―」千葉大学教育学研究紀要 第51巻、2003